

令和3年度 北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツ文化学科  
スポーツ文化専攻 アウトドア・ライフコース  
一般選抜（前期日程） 小論文問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は表紙を含むページ番号1から3までの3ページです。
3. 解答用紙は2枚です。
4. 解答は解答用紙に横書きとし、句読点も1字分として、指定された字数内にまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
5. 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
6. 下書き用紙は2枚です。表裏とも使用は自由です。
7. 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
8. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読み、後の設問1と設問2に答えなさい。

「生きる力」という概念は、平成8年の中教審答申<sup>(註)</sup>「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で最初に使われるようになった。ここでの「生きる力」とは、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力であり、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」や、「たくましく生きるための健康や体力」を備えたものであるとされる。

この答申を踏まえて、学校教育の基本は「生きる力」の育成におかれるようになり、その後この理念は法的にも明確にされるようになった。

(中略)

平成23年の中教審答申では、「生きる力」を育成するにあたっては、他者、自然、社会との関わりの中で意欲を育むことや、体験活動を充実させていくこと、コミュニケーションの基礎となる言語活動など、実際に社会を生きていく力として必要な資質を育てていくことが重視されている。

根本的な考え方としては、現存の各教科の重要性を認めつつ、現実の社会に対応できる力、現代社会を生き抜く実践力を身につけさせることを狙いとしている。具体的には、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力といった能力が社会に対応できる力であるとされる。

(中略)

平成10年の学習指導要領では「生きる力」という目標が明記され「自ら学び自ら考える力」の養成を目的とするようになる。そして平成20年には「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」「主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を活かす」「学習習慣が確立するよう配慮」というように、より具体的に「新しい学力観」を規定するようになる。

この流れは現在に至るまで受け継がれているが、ひと言でまとめれば、従来の「伝統的な学力」育成では得られなかった、「問題解決型学力」が共通の目標とされているとあってよい。

(中略)

このように、「新しい学力観」が提示され、修正を加えられつつも教育の目標として堅持されてきている背景には、次のような見方があるだろう。

第1に、現代社会に生きる人々は、必然的に「変化の中に生きる社会的存在」としてあらねばならないということがある。変化の激しい社会では、様々な情報をもとに他者と協働して課題を解決する力が必要となる。

固定化した社会であれば、固定化した知識を継承することで社会の再生産が可能になるし、それによってその社会に生きる人々の生活も安定する。しかし変化が激しい複雑な社会になると、継承すべき知識自体が変化してくる。この変化する状況や知識に対応しなければならない。その

ために、平和で民主的な国家及び社会の形成者として求められる力、生産・消費等の経済的主体として求められる力、多様な情報や情報手段を主体的に活用するために求められる情報処理の力、物事を多角的・多面的に吟味するクリティカル・シンキングの力など、様々な力を育てることが必要とされるのである。

第2に、グローバル化する社会に対応する必要が生じていることがある。そのため、言語や文化に対する理解を深め自国語で表現する力、外国語を理解し表現する力が求められる。そして、身につけた言語能力をツールとして、古典・芸術等の日本文化を理解し伝承するとともに、異文化を理解し、異文化をバックグラウンドに持つ人々と協働していく力が求められる。

(中略)

「新しい学力」としての「問題解決型学力」には、「伝統的な学力」と違って、その学習方法や評価の仕方においてまだまだ未知の問題が数多くある。しかし「新しい学力」を求める流れが今後の学力観の中心であり続けることは、おそらく確定的なものである。国際的にも、この問題解決型の学力を求めることが、明確に共有されているからである。

出典：齋藤孝（2016）『新しい学力』，岩波書店，一部改変

(注) 中教審答申：正式には、中央教育審議会答申という。

### 設問1

この文章を550字以上600字以内で要約しなさい。(100点)

### 設問2

文章中にある「問題解決型学力」を育成するために、野外活動や自然体験活動がどのように貢献できると考えるか。自身で考える1つの具体的な活動プログラムの内容とそれによって育まれる力について、550字以上600字以内で説明しなさい。(100点)